CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci., 63, 13-19 (2015)
武庫川女子大紀要（自然科学）

阪神パークのチンパンジー

落　合　知　美・池　田　克　巳・蓬田　健太郎
（武庫川女子大学バイオサイエンス研究所・薬学部・生活環境学部）

The History of Chimpanzees in Hanshin Park

Tomomi Ochiai, Katsumi Ikeda, Kentaro Yomogida

Institute for Biosciences, School of Parmacy and Parmaceutical Sciences, Department of Food Sciences and Nutrition, School of Human Environmental Sciences, Mukogawa Women's University, Nishinomiya, 663-8558, Japan

Abstract

"Hanshin Park" located in Nishinomiya, Hyogo prefecture was an amusement park owned and operated by the Hanshin electric railway company limited. The park was opened near Koshien Stadium in 1929, using the land after the exposition of accession for Emperor Showa. In the1930's it had a chimpanzee, extremely unusual to see for the public in Japan. Unfortunately, the park was closed in 2003. We investigated the history of the facility the chimpanzees lived in, by checking documents, newspaper articles, and research papers. The female chimpanzee named "Opera" was imported to Japan from Africa in 1934 and she became nationally famous, riding a bicycle, walking on stilts, and so on. Although it is not known when Opera died, it is estimated that she lived there for 2 to 5 years. A male chimpanzee named "Bamboo" came to Kobe around 1940. Because the site of the park was using for military airport, he had to move to Higashiyama Zoo, Nagoya-city in 1943. By the end of World War II, he was the only chimpanzee still alive in Japan. Hanshin Park was opened again nearby in 1950 and a female chimpanzee named "Birdie" arrived in 1973. Two of the three chimpanzees found in this research were not registered in the Japanese Association of Zoos and Aquariums studbook. The information will be valuable not only for learning more about captive chimpanzees but also for improvement of their welfare.

諸　言

チンパンジーは，日本人にとって動物園で容易に見ることのできる馴染みの深い動物の 1 つである．現在，国内の 51 施設で 319 個体が飼育されており（2015 年 9 月 1 日現在），関西では，神戸市立王子動物園，大阪市天王寺動物園，京都市動物園で群れ飼育されている [1]．チンパンジーが日本に初めて紹介されたのは 1921 年と推測されるので，その歴史は 100 年ほどになる [2]．全国各地に動物園が普及し，チンパンジーが広く飼育されるようになったのは，第 2 次世界大戦以降のことである [3]．それ以前は，海外のサーカスなどによる一時的な滞在や，輸送や飼育の不備による低い生存率のため，一般には見ることのできない珍しい動物種の 1 つであった．

霊長類の研究は，ヒトの進化を考える上で，生物学だけでなく文化人類学や心理学でも，多くの知見を齎してきた．特に，チンパンジーはヒトに最も近い種として，様々な研究に利用されてきた歴史的経緯がある．現在，チンパンジーの生息地を取り巻く状況の悪化から，飼育下におけるチンパンジーの飼育の重要性は増しており，その飼育環境や飼育方法への配慮が進められている．文部

科学省は，大型類人猿（チンパンジー，ボノボ，ゴリラ，オランウータン）の個体登録データベースを整備し，日本の動物園などで飼育された個体をすべて登録している[1]．しかし，資料の不備や散逸などにより不十分なままとなっているものも多い．特に，すでに閉鎖した施設で飼育されていた個体の情報などについては，その情報の詳細を知ることは難しい．

また，展示施設としての動物園や水族館への需要の変化から，動物福祉の観点からも動物園や水族館のあり方が議論されるようになった．このような中で，わが国におけるチンパンジー飼育の黎明期の状況の把握は，今後の飼育のあり方や動物園の意義について多くの情報を与えてくれるだろう．

本調査の対象となった「阪神パーク」は，1930年代という早い時期からチンパンジーを飼育し，2003年に閉園した．そこで，その施設の歴史的経緯をまとめるとともに，飼育されていたチンパンジーについての調査をおこなった．郷土資料や地方新聞，運営会社の資料を重点的に調べることで，その詳細を明らかにしようと試みた．

方　法

「阪神パーク」の設立から閉園までの経緯を調べるとともに，その時々で飼育されていたチンパンジーについて調査をおこなった．調査方法は，文献調査を中心にした情報収集である．

阪神パークの運営母体であった阪神電気鉄道株式会社（以下，阪神電鉄）には，ウェブページに記載されているメールアドレスから問い合わせをおこなった．阪神電鉄の内規に基づき「社史資料等貸出申請書」を提出し，資料提供を受けた．

郷土資料を確認するため，西宮市立図書館，西宮市立郷土資料館，西宮市立甲子園浜自然環境センターを訪問し，直接問い合わせるとともに，郷土の情報について書かれた蔵書やパネル，研究会資料などを確認した．

新聞記事の検索は，朝日新聞オンラインデータベース「聞蔵 II ビジュアル」や毎日新聞記事データベース「毎日 News パック」（1872年3月29日～現在），読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」の「明治・大正・昭和」（1874年11月～1989年12月東京本社発行の全国版記事を収録）などを検索した．大阪朝日新聞（データベース化されていないもの）は，武庫川女子大学の図書館所有の該当年代を調査し，チンパンジーに関する情報を拾い上げた．

公益社団法人日本動物園水族館協会（以下，日動水）が発行するチンパンジー国内血統登録書及び，日動水年報の阪神パークに関わる部分についても調査した．文部科学省ナショナルバイオリソースプロジェクトによる「大型類人猿情報ネットワーク（GAIN）」が作成するチンパンジーのデータベースも参照した．

結　果

阪神電鉄への問い合わせに対し，総務部法務担当者から，「（阪神パークの）飼育記録，文献等は発見できませんでした」との返事をもらったが，同時にチンパンジーが掲載された絵葉書やパンフレット，全7件の資料提供を受けた．阪神電鉄が発行した50年史冒頭には，「本書は初め「阪神電鉄開業50周年史」として企画されたのであるが，不幸にして当社は戦時中にたびたび爆撃を被り，折角蒐集していた史料もほとんど烏有に帰し」と書かれている[4]．そのため，経営母体である阪神電鉄から阪神パークもしくはそこで飼育されていた動物について，これ以上の情報を得ることは難しいと判断した．

新聞各社のオンラインデータベースの検索では，「朝日新聞縮刷版 1879～1989」（1879年1月～1989年12月本社発行記事を中心に収録）や「アサヒグラフ 1923～1956」（1923年1月創刊号～1956年12月発行の雑誌アサヒグラフを収録）に，戦前のチンパンジーについての情報を発見した．しかし，東京の情報が中心であり，一部，大阪動物園（現在の大阪市天王寺動物園）の記事も発見されたものの，阪神パークに関する記事は発見できなかった．

飼育が明らかになったチンパンジーは，戦前の2個体と戦後の1個体の，計3個体のみだった．戦前に飼育されていた「オペラ」と「バンブー」は，国内血統登録書には記載されていなかったが，新聞記事や文献，書籍などでその存在を確認することができた（詳細は後述）．一方，戦後の個体「バーディー」は，国内血統登録書に記載されていたが，書籍などで確認することができなかった．この3

個体は，すでに GAIN のデータベースに登録されていた．

阪神パークは，武庫郡鳴尾地域(現在の兵庫県西宮市)の開発により作られ[5]，戦争のあおりを受けて一時閉園した．戦後の 1950 年に，場所を移して再開し，ヒョウとライオンから生まれたレオポンで，有名となった．しかし，その後来園者は減少し，2003 年には完全に閉園した．本調査により，阪神パークという施設の歴史は，その地域の開発や産業と大きく結びつき，大きな影響を受けたことが明らかになった．それは，そこで飼育されていたチンパンジー 3 個体でも同様だった．そこで，その経緯の詳細を以下に示した．

阪神電鉄の開通と遊園事業

阪神電鉄は 1899 (明治 32)年に開設され，1905 年に開通した．阪神間には，官営東海道線(現在の JR)の蒸気機関車が走っていたが，阪神電鉄は大阪と神戸を結ぶ日本で初めての本格的な都市間連絡電気鉄道としてスタートした[4]．その頃，大阪と神戸の人口は爆発的に増加し，特に大阪ではスモッグや騒音，地盤沈下などの環境悪化に悩んでいた．一方で阪神地方は，気候が温暖で緑豊か，水の質も良いが，海と山しかない土地だった．阪神電鉄は，その土地に電車を走らせることで発展させようとした．

1920 年には阪急電鉄が上筒井～大阪間を開通させ，阪神間には路面電車の阪神国道線を含め，4 つの電車が走るようになったことで沿線の開発は進んだ[6]．特に，阪神電車と阪急電車の間には，激しい競争が繰りかえされた．宅地開発により沿線に住む住民を増やすとともに，沿線に遊園地や球場などの娯楽施設を作って客を呼び，沿線の輸送量を増やした．阪神沿線には，「鳴尾百花園(1905 年～後に「武庫川遊園地」に名称変更し，戦中に閉園)」や「香櫨園大遊園地(1907 ～ 1913 年)」，「鳴尾運動場(1916 ～ 1924 年)」，「海水浴場」などが建設された[7]．

甲子園の開発と阪神パークの開園

阪神電鉄が甲子園球場を作るまで，「甲子園」という土地はなかった．東に武庫川，北と西に武庫川の支流となる枝川と申川が流れる三角州は「鳴尾」と呼ばれていた[5]．1920 年，兵庫県が武庫川の大改修工事に乗り出し，枝川と申川を廃川としてその川床 22 万 4 千坪を払い下げた．阪神電鉄はその土地を購入し，真っ先に大球場を建設して，年号に合わせ「甲子園」と名付けた[4]．そして一帯の多角経営に乗り出し，「甲子園ホテル」「テニスコート」「浜甲子園プール」「南運動場」などの娯楽施設を作った(Fig.1)．川の跡に沿って北から，甲子園一番町，二番町，と順に十番町まで名付け，宅地として販売した．その周辺も，上甲子園，中甲子園，浜甲子園と新たに名付けた[8]．1930 年には，阪神甲子園線が，上甲子園から浜甲子園を通り，中津浜まで延長した．

1928 (昭和 3)年に，昭和天皇の即位式に合わせた「御大典意念国産振興阪神大博覧会」が開催された．正門が球場東側に設けられ，浜まで会場が続いた．翌年，その跡地は「甲子園娯楽場」と名前を変更した．1932 年には，海岸沿いの敷地に「浜甲子園阪神パーク」として，動物園と遊園地の運営を開始した．動物展示の方法は，ドイツのハーゲンベック式の堀を利用したものを採用し，池に浮かぶサルの島，ヤギが登れる岩山など，当時の展示技術の先端を行くものだった[9]．1935 年には水族館も作り，ゴンドウクジラの飼育にも挑戦している[7]．

Fig.1　1934 (昭和 9)年の甲子園球場の北に位置する土地を販売する広告．「理想的住宅地」との記載がある．手前の海岸沿いに四角く囲まれているのが阪神パーク[8]．

混血ゴリラ？「オペラ嬢」

オペラは，アフリカに出かけた神戸の中田清一氏が，1934 年 8 月に日本に連れて帰ってきたチンパンジー 2 個体のうちの 1 個体である．大阪朝日新聞の 1934 年 7 月 2 日と 31 日の記事には，中

田氏は黒猩々（チンパンジーのこと）を求めてアフリカに渡り，雄雌 3 組（6 個体）を買い入れたが，自動車での運送途中で 4 個体が死亡し，「オペラ嬢」と「ソッフィー嬢」のメス 2 個体が残ったと記載されている．

面の三人心中
男は絶命，女は生命危篤

Fig.2　中田氏がアフリカから連れ帰ったチンパンジーを紹介する記事．左奥の上に座っているのがオペラ嬢．写真では 2 個体の大きな形態的違いはわからない．（1934（昭和 9）年 8 月 1 日大阪朝日新聞より）

31 日の記事には，「混血ゴリラ”オペラ嬢”」，「珍しいのはゴリラと類人猿の混血児オペラ嬢（3 歳）と類人猿のソッフィー嬢（3 歳）」と記載がある．ゴリラもチンパンジーも類人猿であり，チンパンジーとゴリラの異種間交配の例はないので，「混血」というのはあり得ない．しかし，このように記載されたのは，オペラ嬢の風貌が多少，他の個体と異なったため，それが誇張表記されたのかもしれない（Fig.2）．筒井は論文の中で，オペラを「Bald Chimpanzee」と記載し[10) 11) 12)]，他のチンパンジーより肉食を好んだと書いた[13)]．チンパンジーは，現在 4 つの亜種が確認されており[14)]，オペラ嬢だけ亜種が違った可能性もある．

Fig.3　1934（昭和 9）年 10 月 15 日に撮影された阪神パークのオペラ（阪神電鉄提供）．

Fig.4　阪神パークの絵はがきセットにあるオペラの写真．撮影日は不明（阪神電鉄提供）．

ソッフィーはその後，京都市動物園に購入され，北村多実二氏により「トミー（富美）」と名付けられた[15)]．来日時に，「人間同様スパリスパリと煙草を吸い，コップを握って乾杯」と紹介された通り，動物園でも芸達者で人気者になった．しかし，二度目の冬を超える前に亡くなった．

オペラが阪神パークに入った時期や死亡についての記録はない．阪神電鉄から「オペラ嬢」として提供された 4 枚の写真のうちの 2 枚は，1934 年 10 月 15 日と 1935 年 8 月 24 日に撮影したものだった（Fig.3）．他に撮影日が分かる写真はないが，撮影日不明の絵葉書に掲載された竹馬に乗るオペラ嬢の写真は，体が一回り大きくなったようにも見える（Fig.4）．以上から，1934 年 8 月に来日し，10 月上旬までに阪神パークに来園し，その後 2 ～ 5 年は生きていたと推測できる．

戦火から逃げた「バンブー」

オペラについては，阪神パークのパンフレットや絵はがき，当時の日本のチンパンジーについてまとめた論文などに名前の記載があるが，「バンブー」の記載は，ほとんどない．唯一，阪神パークが戦争で一時閉園した年（1943 年）のパンフレットの文章中に，「チンパンジーのバンブー君」という表記を確認できたのみである[9)]．しかし，閉園記念絵はがきの中に，ストローを使って飲み物を飲むチンパンジーの写真がある（Fig.5）．この絵はがきに名前の表記はないが，顔の色や耳の

形など，オペラとは風貌が異なることから，この写真はバンブーだと推測される．

Fig.5　閉園記念絵葉書のチンパンジー．バンブーだと思われる（阪神電鉄提供）．

バンブーの経歴については，朝日新聞社社会部編集の本「東山動物園日記」に詳しい．バンブーは，アフリカからドイツに向かう油槽船にペットとして乗っていたが，連合軍の潜水艦に追われて神戸に逃げ込み，保護された[16]．阪神パークでは，自転車乗りを披露するなどしていたようだ．しかし，阪神パークの近くに工場を持っていた川西航空機が海軍管理工場となり，阪神パークの敷地に飛行場を作ることとなった．そこで，阪神パークは1943年4月12日に閉園し，バンブーは名古屋市東山動物園に移動した．当時は戦争中だったため，名前を日本名に変えて「正二」と呼ばれた[16]．

阪神パークがあった場所は，1945年の阪神大空襲で焼き野原になったが，移動先の東山動物園でも，空襲から逃れる生活だった．絵本「ぞうれっしゃがやってきた」では，バンブーが飼育員と一緒に自転車で空襲から逃れるエピソードが記載されている．国内の動物園では，猛獣処分や餓死などにより多くの動物が死亡したが，バンブーは第2次世界大戦を生き抜いた，日本で唯一のチンパンジーとなった．

戦後は片手に日の丸を持って自転車に乗るなど，東山動物園で芸を披露していたが，終戦10年後の1955年8月19日に肺炎で死亡した[17]．当時のチンパンジーとしては珍しく，10年以上生きたことになる．

阪神パークの再開園と「バーディー」

1950年4月25日，阪神パークはより内陸の甲子園の近くに場所を移して再開する．移動動物園の地方巡業も始まり，1959年にはヒョウとライオンから生まれたレオポンが2頭，1961年には3頭生まれ，全国ニュースになり有名になった[18]．この時代にチンパンジーを飼育していたのかについては，記載された書類を発見することができず，不明である．

1965年頃の阪神パークのパンフレットには，「モンキーアパートには，チンパンジー，マンドリル，まんとひひ」との記載がある．個体名の記載はないが，自転車に乗るチンパンジーの写真も掲載されている．この時代は，アフリカから日本の動物園に多くのチンパンジーが輸入された時代なので[19]，阪神パークでも複数のチンパンジーが飼育されていたと推測される．しかし，個体名が確認できる資料は見つからず，飼育されていた個体数も不明である．

そのような状況ではあるが，1973年3月31日に阪神パークに来園した「バーディー」を確認することができた．国内血統登録書に，阪神パークが所有した個体として，唯一登録されていた．アフリカ生まれの個体で，日本に輸入された後，阪神パークで10年以上過ごし，1985年2月21日に吉川商会という神戸の動物商へ引き取られ，その後，中国へ移動している．

チンパンジーの国内血統登録書は，1980年代に整備され，その時に飼育されていた国内の多くのチンパンジーが登録された．おそらく，バーディーもその時に登録対象となり，血統登録されたと推測される．阪神パークで他に登録チンパンジーがいないことからも，登録時に，阪神パークで唯一飼育されたチンパンジーであり，その後，阪神パークでチンパンジーが飼育されることはなかったと推測される．

阪神パークは，1985年にレオポンの最後の1頭が死亡，飼育動物を減少させながらも運営を続けていたが，2003年に3月に完全に閉園した．閉園跡地には現在，大型ショッピングセンターができている[6]．

考　察

「阪神パーク」閉園からすでに10年以上が経過した．跡地は大型ショッピングセンターとして華やかな賑わいを見せているため，そこで動物が飼育されていた歴史を感じることはほとんどない．「阪神パーク」という施設の存在自体を知る人も，少なくなりつつある．しかし，チンパンジーの日

本における飼育の歴史においては，大きな足跡を残しており，その名が消えることはないだろう．

阪神パークは，1930年代というチンパンジー飼育の黎明期にチンパンジーを飼育，展示した．1950年以前に日本での飼育が確認されているチンパンジーは，観光客のペットという短期滞在を含めても28個体のみである[2)]．そのうちの2個体が阪神パークに入り，飼育・展示されていることは驚くべきことだろう．

最初のオペラが来園したのは，東京の上野動物園でチンパンジーが飼育される前の話である．上野動物園は，天皇から下賜された日本を代表する動物園であるため，それより先にチンパンジーを確保するには，相当な力が働いたと推測できる．本調査の結果，この頃は阪神電鉄が観光開発に力を入れ，動物園の整備に乗り出していた時期と一致していた．珍奇性，話題性という点から，動物園の目玉として積極的にチンパンジー獲得を目指したものだと思われる．また，アフリカから2個体のチンパンジーが神戸に入ったこと，大阪や京都といった関西の動物園がチンパンジーを欲しがっていたことなど，時期的や地理的な要因も重なったのかもしれない．この時代の動物園が，動物を理解するというものではなく，チンパンジーも展示物としての要素が高かったことをうかがわせる．

戦争は，施設にもチンパンジーにも大きな影響を与えていた．敵国に追われた船に乗って神戸にやってきたバンブーは，阪神パークに入った後も，土地の接収により，名古屋に移動しなければならなかった．名前を日本名に変え，軍服を着，戦火を潜り抜け，日本で唯一生き残ったチンパンジーとなった．戦時下という特殊な状況の中で，単なる展示物としてではなく，生き物として扱われ，戦争を生き抜いた，当時の動物園の動物としても稀な例の1つだろう．

戦後約30年間の復興の過程においては，たくさんのチンパンジーが輸入され，飼育されたと推測されるにも関わらず，具体的な情報はほとんど得られなかった．これは急激な高度経済成長の中で，安易な形での動物園設立があいつぎ，記録がほとんどされてこなかったためだろう．これはチンパンジーに限らず，国内全体のすべての動物種に当てはまる．チンパンジーにおいては，他園でも簡単に見られるようになったことで，阪神パークでのチンパンジーの位置づけが変わったことも影響するだろう．実際，阪神パークはこの時代にレオポンを作り出し，全国から注目されている．これは，オペラ嬢が「ゴリラと類人猿の混血児」と広告され，有名だったことと通じるものがある．しかし，レオポンも一時的な来園者増加にはつながったが，人気を継続させることはできなかった．

阪神パークは，1920年代に始まった阪神沿線開発の中で，電鉄会社により設立された動物園だった．当初はその存在が，地域や会社に好影響をもたらしたことは想像に難くない．戦後は，場所を移転して再開園しているが，産業の発展，自家用車の普及，レジャーの多様化など，設立当時の存在を維持するには，社会の変化が大きかったと推測される．1990年以降規模を縮小させ，2003年に閉園するが，上記の問題に加え，建物の老朽化，会社施設としての位置づけの変化もあっただろう．この頃は，宝塚ファミリーランドやあやめ池遊園地など，電鉄系が運営する動物園のいくつかが閉園しているが，同じ問題に直面していたと思われる．これは，京都や大阪などの公立の動物園と大きく異なる背景だろう．

動物福祉の視点からも，動物の飼育の歴史について学ぶことは重要である．本調査により，電鉄系動物園におけるチンパンジーの展示動物としての位置づけの変化と，開発や戦争，復興といった人間の活動がチンパンジーの飼育に与えた影響が明らかになった．現在は，血統登録書が整備されることで，情報が管理されるようになったが，国内のチンパンジーの個体数はゆっくりと減少している．過去の歴史を正しく理解し，将来を見据えた個体の維持や管理を試みていく必要があるだろう．

謝　辞

本稿は，京都大学霊長類研究所に所属していた時に実施した調査をもとに，阪神パークの情報に限定して新たに情報収集し，まとめたものである．大型類人猿情報ネットワーク（GAIN）の情報は，山崎由紀子，吉川康弘，平井百樹，長谷川寿一，松沢哲郎，友永雅己，伊谷原一，倉島治，赤見理恵，打越万喜子，綿貫宏史朗，鵜殿俊史氏らとの共同研究の成果である．チンパンジーの国内血統登録書は，日動水から提供いただいたデータを利

用している．また，各施設での情報収集に関しては，多くの動物園関係者や飼育関係者にご協力をいただいた．ここに改めて感謝の意を表したい．

参考文献

1） 大型類人猿情報ネットワークウェブサイト http://www.shigen.nig.ac.jp/gain/index.jsp
2） 落合知美ら，日本におけるチンパンジー（*Pan troglodytes*）飼育の初期の歴史 1920-1950 年，霊長類研究，**31**，19–29（2015）
3） 落合－大平知美ら，日本国内の大型類人猿の飼育の過去と現在，霊長類研究，**22**，123–136（2006）
4） 阪神電気鉄道株式会社，輸送奉仕の 50 年，冒頭（1955）
5） 鳴尾・西宮合併 50 周年記念事業実行委員会，なるお：鳴尾・西宮合併 50 周年記念誌，72–73（2001）
6） 平井英子，西宮市立郷土資料館，平成 11 年度親と子の郷土史講座講義資料集，57–97（1999）
7） 橋爪紳也，都市絵はがきⅠなにわの新名所，東方出版（1997）
8） 読売新聞阪神支局編，ふるさと春秋：阪神間の歴史散歩，中外書房（1988）
9）「阪神間モダニズム」展実行委員会編，阪神間モダニズム：六甲山麓に花開いた文化明治末期－昭和 15 年の軌跡，淡交社 224（1997）
10）筒井嘉隆，類人猿雑記，動物心理，**1**（3–4），25–131（1934）
11）筒井嘉隆，類人猿追記，動物心理，**2**（1），32–33（1935）
12）筒井嘉隆，リタ嬢一家，家事と衛生，**l**（11），5（1935）
13）筒井嘉隆，初めてチンパンジーが来たころ，町人学者の博物誌，河出書房（1987）
14）篠田謙一ら，分子系統分析に基づく国内飼育チンパンジーの亜種判定，霊長類研究，**19**，145–155（2003）
15）京都市動物園編集委員会，みんなの京都市動物園：京都市動物園 110 周年記念誌（2013）
16）朝日新聞社社会部編，東山動物園日記，ペップ出版，34–36（1977）
17）千葉胤孝，獣医病理学者より見た動物園の記録，近代文藝社，**32**（1993）
18）南野武衛，西宮メモ，西宮夙川ロータリークラブ，小西印刷所（1991）
19）綿貫宏史朗ら，日本におけるチンパンジー飼育の変遷（1926–2013 年），霊長類研究，**1**，19–29（2015）

受稿日　2015 年 9 月 24 日　　受理日　2015 年 11 月 5 日